



Title	Creative Evolution : Reproduction in George Bernard Shaw's plays
Author(s)	松本, 承子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61836
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 松 本 承 子 ）	
論文題名	Creative Evolution: Reproduction in George Bernard Shaw's Plays 創造的進化—ジョージ・バーナード・ショー劇における生殖
論文内容の要旨	
<p>「ジョージ・バーナード・ショーはフェミニストなのか」という問題提起から本論文を始めた。ショーがフェミニストであるというイメージは蔓延している。ショーのそのようなイメージは彼の作品、随筆、活動などから湧き上がっている。しかしながらショーをフェミニストと見做すことは誤りであるという主張が浮上した。この議論がショーはフェミニストであるかどうかを調べる切っ掛けになった。従って本論文ではその問題をショーの初期の作品からノーベル文学賞を受賞するまでの主要な8作品に描かれる女性の登場人物を分析する事で熟慮していく。扱う作品は、『ウォレン夫人の職業』（1898）、『カンディダ』（1898）、『人と超人』（1903）、『バーバラ少佐』（1907）、『ジョン・ブルのもう一つの島』（1907）、『ピグマリオン』（1916）、『メトセラへ帰れ』（1921）、『聖女ジョウン』（1924）である。</p> <p>これらの作品を考察する上で、今まで使われていなかった視点である「生殖」という点を採用する。この視点は『メトセラへ帰れ』を読んだ時に思い付いたものである。そこでは人間が最終的に卵生動物になる。何故ショーは人間を卵生に描いたのか疑問に思ったからである。ショー演劇を理解する上で「生殖」という視点は鍵となる。何故ならショーが生涯提唱してきた創造的進化論と深く関連しているからである。</p> <p>本論文の目的は5つある。第1にショーがフェミニストかどうかを調査する事である。第2にショーの女性登場人物を分析することで彼の創造的進化論とは何か、第3にショーが女性登場人物を描くことで何を表象しようとしていたのかを把握することを試みる。第4にショーが彼の作品を通して女性に何を教育しようとしていたのかを理解するためにショーがどのように女性問題を扱ってきたのかも考察する。何故ならショーは演劇の目的は教育であると公言していたからである。最終的にショーの劇作法、また彼がどのように彼独自の劇作法を作り出したかを捉える。</p> <p>第1章では『ウォレン夫人の職業』と『カンディダ』を比較する。ここでは2人のヴィクトリア朝時代の女性であるカンディダとウォレン夫人と彼女の娘であり、新女性と表象されるヴィヴィを比較することで結婚と売春との関係、男性中心社会での女性の役割、女性の自立を考察する。両作品では女性が貧困から逃れる手段として結婚や売春を利用する状況が描かれている。しかし貧困から逃れた後でもカンディダとウォレン夫人は共に男性から肉体的、経済的に搾取される。その一方で次世代のヴィヴィは男性から自立した道を選ぶことが出来る。彼女がその道を選択できるのはすべて彼女が受けてきた教育のお蔭である。</p> <p>第2章では『人間と超人』と『バーバラ少佐』を比較する。両作品には共通点がある。それは両作品のヒロインは初め新女性として見做されているにもかかわらず、最終的には時代の流れに逆らい結婚、出産に収まる。ここではこの2人の決断に注目する。特に前者の作品では優生学に照らし合わせながら作品を再読する。そこでは積極的優生学の必要条件が示される。その条件を満たした男女は「選民」である次世代のために自己を犠牲にする。またそれらの男女は「選民」作りの為に文明を捨て、より自然にちかい場所へと向かう。後者の作品で、ショーは貧困者を産み出す資本主義のみならず貧困者を救済する救世軍も非難する。ここでは富の分配の必要性が強調されている。しかしそれを成功するためには女性が犠牲にされることが作品内で提示される。</p> <p>第3章では『ジョン・ブルのもう一つの島』と『ピグマリオン』の2作品の中で、何故ショーがこの時代にミソジニスト（女性蔑視者）を描いたのかを考察する。その際にイヴ・K・セジウィックの「男性のホモソーシャルな欲望」論を使って2人のミソジニストと1人の女性から構成され三角関係を見ていく。前者では作中で描かれる「恋愛物語」とアイルランド人のノラに焦点を当てる。二人のミソジニストは新しい女性の到来に脅かされ、自分達の精神的バランスを保つ為にアイルランドに向かう。そこにはイギリスにはもはや存在しない因習的な女性であるノラと出会う。トム・ブロードベントは郷愁的に彼女を求める。後者ではショーが拘った結末に焦点を当てる。それはイライザがヒギンズの元から去るという結末である。ここでは2人のミソジニストであるヒギンズとピカリングがイライザを皮肉に</p>	

も新女性に育て上げる過程が描かれる。

第4章ではショーの創造的進化論をフェミニスト、ジェンダー、性の観点から再考するために『メトセラに帰れ』を考察する。またその作品をJ・J・バッハオーフェンの家母長制理論を使ってメトセラサークル内の性とジェンダーの進化過程を考察する。第1段階では家母長制社会での男女平等が描写されている。第2段階では家父長制の基礎が樹立される。第3段階では家父長制が完全に家母長制に取って代わり、短命人の男女の役割が明確に決定される。第4段階では文明化が止まり、首都がより自然に近い場所へと移行する。人類は男女というより、知的、無知と分けられる。第5段階ではアイルランドが長命人の首都となり、バクダッドが短命人の首都となる。前者では人類は、男女ではなく年齢で区別される。第6段階では短命人は絶滅し、長命人のみ存在する。彼らは卵生動物に変化し、若者と古老に区別される。ショーはこの作品で性と性役割の創造的進化を描く。その進化は渦の形として変化していく。彼はこの作品で男女差別を払拭するためには女性から出産能力を取り除く長命と知性が重要であると訴える。

第5章では『聖女ジョウン』でショーはトランスジェンダーであるジョウンを兵士の姿として描いたことを論じていく。ショーのジョウンをジュディ・パトラの「身体への書き込み、パフォーマティブな攪乱」論を通して考察する。ショーは女性の役割を捨て、男性の役割を担った女性としてジョウンを描く。しかし社会の規範に背くジョウンは権威ある男性陣に忌み嫌われる。何故なら一つに彼女は一般市民に支持されているからである。またジョウンが謀反を起こし、自分達の体面を汚していると彼らは信じているからである。更に彼らはジョウンが異性の衣類を身に付ける事に最も憤慨しているのである。彼女の存在は彼等が構築してきた社会を混乱させるからである。ショーのジョウンは自分の役割を性に関わらず自分で決定できる人間である。しかしそれは彼女の自分本位からではなく国家のためである。ショーはジョウンを通して国家のために自己を犠牲にする女性を尊く描く。

概して、ショー演劇には4つの特筆すべき功績がある。第1にショーはヴィクトリア朝時代に理想化された女性像から離れた女性を描いた。第2に彼は貧困故に行われる家庭内と職業としての売春を描くことでショーは女性ではなく、そうせざるをえない状況を作った社会を非難した。第3に自立する女性の存在に脅かされるミソジニストの姿をショーは描いた。第4に彼は家母長制を描いた。これは彼の最も優れた功績であると思われる。

しかしながら彼の以上の功績にもかかわらず、彼のフェミニズムは4つの点で限界がある。彼にはまだ女性に対して先入観がある。第1にショーは知性と生殖が共存できるとは、また知的な女性が出産できるとは考えることができなかった。それ故に彼は女性を2種類、生殖を行う者と生殖を行わない者（働く者）に分ける。ショーは女性がもし望むのであれば、出産と労働の両者を選ぶ、もしくは拒絶する権利があることを信じていなかったようである。彼は1部の女性の能力を生殖に制限し、女性を肉体的物質と見做し、男性は女性より遥かに知性を有すると決めつけている。第2にショーは中産階級女性が「選民」を産み出す積極的優生学に適していると判断する。第3にショーは女性の自己犠牲を気高いものとして描く。それ故にある程度ショーは女性が国のために自己を犠牲することを奨励する。第4に彼はこの世にはたった2つの性別、女性と男性しか存在しなく、男女の身体的相違は生れつき決定されていると考えている。

以上に見てきたようにショーのフェミニズムには限界があるが、19世紀後半から20世紀初頭において、彼は性、性的役割、性差別を排除する方法を熟慮してきた。またそうすることで彼が出来る限り女性を支援してきたことは事実である。その根底には彼は社会を変えたいという思いがあったからである。それは彼の劇作法に現れている。

ショーの劇作法の最も顕著な特徴は「変化への希望」である。本論で扱ってきたショーの演劇の全てで「変化への希望」が次世代に託される。彼の演劇は行き詰まり、放棄、変化への希望と展開する。これは渦のように形作られた創造的進化を示唆する。ある世代は何もなくゼロから始めるのではない。何故なら先の世代が彼らの時代に多くのことを経験していることが、その世代に備わっているからである。ただ先の世代が成し遂げられなかったことが「変化への希望」として次の世代に残される。それ故にその世代は自分達がすべきこと、自分達の目標が何であるかが分かる。従って、その世代は次の段階へと進化していく。その結果その世代は先の世代とは少し異なる。人類は新たな世代の誕生ごとに進化する。この考えはショーの楽観主義的な一面を表している。彼は人間が常に進化すると信じていて、後退するとは考えていない。それは彼が人間の知性を過大評価していたからである。

ショーは人間が変化するためには知性は人間にとって最も必要不可欠であると信じていた。それ故に彼は教育こそが社会において最も重要な課題であると考えていた。教育という目的のために、彼は演劇を利用し、劇場を教育の場として扱った。彼が人々に教育したかったのは彼の創造的進化論である。ショーにとって演劇は彼の創造的進化論を浸透させる媒体である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (松 本 承 子)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査 言語文化研究科教授	畑田 美緒
	副 査 言語文化研究科准教授	中村 未樹
	副 査 言語文化研究科教授	貴志 雅之
	副 査 言語文化研究科教授	渡邊 克昭
	副 査 言語文化研究科准教授	霜鳥 慶邦

論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文“Creative Evolution: Reproduction in George Bernard Shaw’s Plays”は、劇作家ジョージ・バーナード・ショーには、その作品、随筆、活動から「フェミニスト」であるというイメージが一般的に付与されている一方で、そのイメージに対して反論を唱えている批評家もいることに注目し、ショーのフェミニズムについて再考を加えている論文である。本論では同作家の初期作品からノーベル文学賞を受賞するまでの主要8作品を扱い、ショーが生涯にわたって提唱し、彼の演劇を理解する上で不可欠である「創造的進化論 (Creative Evolution)」の概念と関連付けながら、各作品内の女性登場人物を分析している。本論文の独創的なところは、従来の研究ではヒトラーの優生学を想起させるから、という理由で回避されがちであった「生殖 (Reproduction)」という視点をあえて導入し、それと「創造的進化論」との関係をふまえながら、ショーのフェミニズムおよび劇作法全体を捉え直すとした点である。

序章で、ショーを「フェミニスト」と捉えている先行研究を挙げ、執筆者が本論文の着想を得た経緯を述べた後、第1章 The Way Out of Poverty: Marriage and Prostitution in *Candida* and *Mrs Warren’s Profession*では、『カンディダ』と『ウォレン夫人の職業』の2作品に登場する女性たちに注目しながら、ヴィクトリア朝の男性中心社会における女性の役割と自立について考察している。女性が貧困から逃れる手段としてカンディダは結婚を、ウォレン夫人は売春を利用するのであるが、いずれの場合も結局は、「生殖(Reproduction)」の道具とされる、または金銭の収入源として利用されることで、男性による搾取の対象となっている、という点では大差がないことをまず指摘する。その上で、ウォレン夫人の娘であるヴィヴィだけが「新しい女性(New Woman)」として男性から自立した生き方をすることに言及し、ヴィヴィと上記の二人の女性との違いが、彼女の受けた教育に起因すると分析し、女性の自立における知性や教育の重要性を示唆してこの章を締めくくっている。

第2章 Creative Evolution Through Reproduction: Self-Sacrifice for the Next Generation in *Man and Superman* and *Major Barbara*は、『人間と超人』の女主人公アンおよび『バーバラ少佐』の女主人公バーバラが、最初は自立した女性たちであるにもかかわらず、最終的には二人とも結婚・出産という伝統的な女性のたどる道に従うという点に注目し、この2作品を比較した章である。前者の作品については、「超人」の誕生の必要性が描かれている原因として、ボーア戦争におけるイギリス軍の苦戦という現実によって浮上した「衰退に対する恐れ」が背景にあると指摘し、国家の繁栄のために優れた子孫を残すという目的のもとで、女性の役割が「生殖」に限定されていく過程を分析している。後者では、バーバラが救世軍での仕事を辞めて母親と同じように結婚する道を選ぶことになる原因を、自分の自立が父親の経済力と祖父の社会的地位に支えられた、表面的なものに過ぎなかったことをバーバラが悟るところに見いだしている。その上で、この作品でも、女性は力と知性を持った男性によって制限された役割しか果たせない存在におさまってしまう結果となることを示し、両作品において、ショーが考えるところのLife Forceは、女性の自由の喪失に帰着すると説明している。

第3章 Male Homosocial Desire: An Imbalanced Triangular Relationship of Two Misogynists with a Woman in *John Bull's Other Island* and *Pygmalion*は、『ジョン・ブルのもう一つの島』と『ピグマリオン』に共通してみられる、2名のミソジニスト（女性蔑視者）の男性と1名の女性による三角関係、という構図に着目しながら、自立した「新しい女性」を特に嫌悪する男性たちが女性に対してどのように振舞い、それがどのような結果をもたらすかを分析している。前者では、イングランドの強い女性ではなく、アイルランドの従順かつ受動的な女性と結婚することで男性の友人（アイルランド人）との絆をより強固にしようとするブロードベント（イギリス人）の強すぎる支配力が、妻のみならず友人の存在をも霞ませてしまい、三角関係をいびつなものに変容させてしまうことを述べる。一方、後者では貧しいイライザに教育を施したミソジニストのヒギンズが、結果として自立した女性を作り出してしまうという皮肉と共に、自由になったはずのイライザが、最終的には他の男性との結婚することでまた「生殖」の道具という限定的な役割を担うようになる、という皮肉が重層的に展開される様子を論じている。

第4章 Creative Evolution: Beyond Matriarchy in *Back to Methuselah*では、『メトセラに帰れ』の中で、当初の「家父長制社会」が徐々に変化していく様子を、段階を追って扱っている。家父長制の基礎の樹立から、男女の役割が明確に規定された家父長制への移行、文明の停止と自然への回帰、それに伴い男女の区別よりも知性の有無によって人類が区分されるようになる段階、次に寿命によって人類が短命と長命の2種類に分かれる段階を経て、最終的に長命人のみで構成される世界へと進化した段階では人類は卵生として描かれ、それは男女の別が完全に払拭されたことを象徴するものであり、そこに到達するには長く生きている間に培われる知性が必要であることを指摘している。

第5章 A Performative Transgender Image in *Saint Joan*では、当時の女性に割り当てられていた役割を捨てて男装の兵士として振舞う聖女ジョウンが、国家のために尽力しているにも拘らず、特に権力者の地位にある男性たちから忌み嫌われるようになる理由を、彼女の服装や一般大衆から得ていた人気および大衆に与える影響力の大きさなどさまざまな角度から分析し、「生殖」の役割を担わない女性が、別の形で自己犠牲を強いられる社会構造について詳述している。

最後に、ショーの提唱する「創造的進化論」は、今後何世代にもわたって徐々に起こる変化であり、次に生み出される世代は現在の世代よりも優れたものになっているはずである、という楽観主義的な視点に基づいていることが言及される。その一方で、次世代を産み出すために必要な「生殖」という行為が、実は女性の役割を制限する可能性も秘めていることをショーの作品は多様な形で描いており、当時の社会状況に対する作家の鋭い洞察と、より良い未来に向けての「変化への希望」を力強く提示していると結論づけている。

以上のような論文の内容をふまえ、審査員からは、キーワードとなるいくつかの言葉の定義がなされていないために議論が曖昧になっているところがある、もっと当時の社会的・文化的コンテクストに照らし合わせて論じた方が説得力のある論になる、作品あるいは批評書の引用をした後で十分に自らの論を展開しないまま次のポイントへと移ってしまっている箇所が何カ所もある、特に第4章ではプロットの紹介が長過ぎて肝心の主張したい点が明確になっていない、などの指摘がなされた。

しかしながら、ショーの作品を広範囲にわたって扱い、170余ページの英文にまとめ上げた本論文が、執筆者の多大な努力と労力の所産であることは間違いなく、荒削りではあるものの随所に散見される興味深い着眼点は、更なる研鑽を積むことによって大きく発展させることが可能であり、今後優れた研究者として活躍することが期待できる。

上記考査に基づき総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。